第30回
函館港イルミナシオン映画祭 2024
第28回シナリオ大賞
函館市長賞〔グランプリ〕

函館家族

土屋 眞利

【作者プロフィール】

土屋 眞利（つちや　まさとし）

１９７９年生まれ。大学卒業後、映画美学校フィクションコースへ。映画制作の全体を学び、専門を脚本とすることを決意。その後、シナリオ作家協会シナリオ講座でシナリオ作法を学び、現在に至る。

【登場人物】

小笠原和夫（５８）会社員
小笠原美佐（５５）和夫の妻
小久保亜希（３４）和夫の長女
五十嵐玲香（３２）和夫の次女
小笠原梨子（２４）和夫の三女
小久保楓（１１）亜希の長女
五十嵐瑛斗（えいと・９）玲香の長男
五十嵐圭志（けいし・６）玲香の次男

大西義夫（６１）和夫の親友（本当は実兄）
大野幸子（５９）義夫の内縁の妻

小久保陽介（３６）亜希の別居中の夫
小久保絹枝（７０）陽介の母

サル（２４）ネパール人。亜希の同僚
道下朋美（３４）亜希の中学校の同級生
鈴木麻衣（３４）亜希の中学校の同級生
鈴木大雅（たいが・１２）麻衣の長男
細田真理子（３６）和夫の担当医師

平川恵三（７４）『道南銀鈴会』代表
磯貝徹（３２）医師
月岡（５０）大阪のヤクザ

【あらすじ】

二〇二三年。

函館に暮らす小笠原家は、長女の亜希が娘の楓、次女の玲香が長男・瑛斗と次男・圭志を連れて出戻ったことで、毎日が大騒ぎ。小説家志望の三女・梨子は不満で仕方ない。

だが、父・和夫も母・美佐も表情は明るい。天涯孤独で施設育ちのふたりにとって賑やかなマイホームは大歓迎だった。

そんな小笠原家には不思議なおじさんが出入りしていた。娘や孫たちから絶大な人気を誇る『よっちゃん』こと大西義夫だ。義夫は和夫の親友で、小さなクリーニング店を営みながら自由きままに暮らしていた。

この年、和夫に喉頭がんが判明する。『声を失う』という厳しい現実に直面した和夫はあることを思いつく。

和夫は娘たちには隠していたが、天涯孤独の美佐と違い、大阪に家族があった。友人と偽っていたが、義夫は実兄なのだ。義夫のすすめで和夫は大阪時代や大西家とはきっぱり縁を切っていた。

そんな和夫がただ一つだけ縁を切れずにいたもの。『阪神タイガース』だ。

夏の大阪出張で、快勝を続けるタイガースを間近に見て、和夫はこう願う。

（たったいちどでいい。家族と『六甲おろし』を歌いたい）

タイガースのおかげで和夫の願いは叶う。声を失った和夫だが、家族の絆を新たに強めた。

冬が来て、新たな問題が小笠原家を襲う。長女・亜希の嫁姑問題から端を発し、ついに義夫と和夫の出生を家族が知ることになったのだ。

義夫と和夫が大阪を離れ函館に来たのには理由があった。義夫は十代の頃、酒乱だった実の父親を殴って死なせてしまっていた。

和夫と同じくらい『家族』の愛に飢えていた義夫。そんな義夫のせいで、溺愛する亜希は離婚を余儀なくされる。義夫は自決するかのように車で電柱へ突っ込んでしまう。

一命を取り留めた義夫。

退院の日、義夫の『家族』は義夫を待っていた。

二〇二四年、春の函館。和夫と義夫が力を合わせて懸命に作った『家族』が、そこにあった。

○炎天下の大阪市街（昼）

盛夏。大阪城や梅田オフィス街など、その風景いくつか

――

字幕『二〇二三年八月』

○近代的な高層オフィスビル

その威圧的な外景――

○同・大会議室

自動車メーカーの営業幹部たちのまえで、小笠原和夫（58）が話している。髪を七三で整え、実直そのものの和夫。その声、少し擦れている。

和夫「……以上が『道南モデル』と名付けた我々の営業戦略であります。北海道と関西では、地理的、気候的にかなりの相違があるわけですが、本モデルの普遍部分の適用は関西地区の更なる販売強化に寄与するものと確信しております」

芯を食った感じで聞き入る聴衆。

司会の声「それでは質疑応答に移らせて頂きます」

和夫、ホッとしたようにコップの水で喉を湿らすと、やはり喉に違和感――

○大阪市内・場末の横丁（昼過ぎ）

大西義夫（61）が歩いている。義夫、アロハに短パンが良く似合うダンディなイケオジ。右手にスマホの地図アプリ、左手にハンディ扇風機。

義夫「（苦笑して）道民が真夏に大阪なんか来るもんじゃねえな」

× × ×

小さなビルの前に佇む義夫。義夫の視線の先には『大西興業』の看板。

義夫「……（射るような眼差し）」

事務所の重厚な扉が開き、巨漢のヤクザ（月岡・50）が顔を出す。

月岡「（不審そうに）どちらさん？」

義夫「（相好を崩し）ここいらに唐揚げの旨い定食屋さんがあると聞いたのですが？」

月岡「知るか！　交番で訊けや！」

乱暴にドア閉まる。

義夫が歩き出すと、背後でドアの開く音して、月岡が出てくる。

月岡「そこの角曲がって少し行ったとこに『珍味軒』ってある。『唐揚げ』もいいが『ナス味噌』が絶品や」

義夫が会釈する。

月岡、手を挙げ、事務所に戻る。

義夫、角を曲がって歩き進むと『珍味軒』を一瞥し、そ

のまま通り過ぎる。

義夫「……（射るような眼差し）」

○小さな墓地（夕刻）

丘陵地にあって、荒れ墓が多い――

義夫が供花を持ってやってくる。

義夫「……（周囲を見回し）」

義夫、アロハを脱いでタンクトップで草むしりを始める。

○居酒屋（夜）

テレビに阪神タイガースのナイターが映っている。それを見ながら飲んでいる客たち。試合、同点で延長にもつれ込んでいて――

ワイシャツの和夫とアロハの義夫がテーブルでビールを飲んでいる。

義夫、和夫の会議資料『道南モデルの歴史』をめくりながら、

義夫「定時制高校しか出てないヤツが、大卒のエリート集めて講義したんだ。いやァ、爽快だね、じつに爽快」

義夫、会議資料をテーブルに置くと、和夫のコップにビールを注ごうとする。

和夫「（それを制し）もうやめとく」

義夫「喉か？」

和夫「（頷いて）」

義夫「だから言ったろ。早く病院行けって」

和夫「もう行った」

義夫「（緊張気味に）……どうだった？」

客たちの「ワーッ」という歓声が聞こえてくる。

義夫「お、勝ったか？」

「延長サヨナラや！」という声。

義夫「今年は強いな。ひょっとして本当に優勝するんじゃねえの？」

ゲームセットで、店内は一気にお祭りモードになって――

従業員と客が総出で『六甲おろし』大合唱が始まる。義夫と和夫も参加する。義夫も和夫も『六甲おろし』を楽しそうにフルで歌いこなす。

和夫「！（いいことを思いついた）」

○盛夏の函館（昼）

大阪市街とは打って変わって涼やかな街並みと緑深い函館山など、その風景いくつか――

○タイトル『函館家族』

○函館市内の住宅街（昼）

庶民的な家屋並んで――

○小笠原家・外観（昼）

とりたてて古くもないが新しくもないこぢんまりした一軒家。狭いが綺麗に芝生の植わった庭や、窮屈そうにガレージに並ぶ洗車の行き届いたセダンと軽など、慎ましやかな上品さ――

だが、その表札はにぎやかだ。『小笠原』『五十嵐』『小久保』と三文字苗字が三つも並んで――

○同・ダイニングキッチン

小笠原美佐（55）と次女の五十嵐玲香（32）が昼食の支度をしている。美佐と玲香、ふくよかな美人で雰囲気が良く似ている。美佐が唐揚げを揚げている隣で玲香はサラダを担当。そうめんが茹であがってある。

隣室のリビングから子どものはしゃぐ声がして――

玲香「（リビングへ）できたよ。楓と瑛斗、運んでちょうだい！」

「はーい」という元気な返事とともに小久保楓（11）、五十嵐瑛斗（9）、五十嵐圭志（6）が駆けてくる。

圭志、背伸びしてサラダの皿をとろうとする。

玲香「圭志はいいの！　いつもこぼしちゃうんだから！」

美佐が圭志の頭を撫でて、

美佐「圭ちゃん、偉いねェ。運んでくれるんだねェ」

玲香、美佐を制して圭志を持ち上げリビングへ。

楓と瑛斗がてきぱきと皿を運ぶ。

美佐「（楓に）楓、梨子呼んできて」

○同・梨子の部屋

（ここから無音）

机上のノートPCを前に瞑想している三女の小笠原梨子（24）。小柄で可愛らしい梨子と、文豪然としたその佇まいのギャップに可笑しみが漂う――

梨子の両目がカッと開き、一気呵成にキーボードを叩き出す。モニターに文字列が連なっていき――

本棚には本がびっしり。入りきらない本が至る所に積まれている。壁のホワイトボードに、手書きの小説新人賞の締切一覧。

梨子、書いたものの推敲を始め、頭を掻きむしり、いま書いた文章をさっぱり消去してしまって――

机の端のパトランプ風のものが点滅する。梨子、両耳から耳栓を外す。

（無音、ここで終わり）
圭志のはしゃぐ声が階下から響いてきて――
梨子「（うんざり）」
梨子、ドアに向かって、
梨子「入っていいよ」
ドアが開き楓が入ってくる。
梨子「何？」
楓「梨子ちゃん、お昼ご飯だよ」
梨子「いいよ。あとで適当につまむから」
楓「じいじとよっちゃんがもうすぐ着くの」
梨子「え、あの二人もう着いたの？」
玄関ドアの開く音とともに、
義夫の声「お～い、帰ったぞ～！　楓、瑛斗、圭志、おみやげだぞ～！」
楓、嬉しそうに部屋を出て階段を駆け下りていく。

○同・リビング

和夫、義夫、美佐、玲香、楓、瑛斗でテーブルを囲んでいる。圭志ははしゃいで部屋中を走り回っている。人口密度、極めて高くて――
みんな阪神タイガースの法被を着ている。圭志は応援メガホンを両手で打ち鳴らしはじめて――
和夫と義夫、肩を組んで『六甲おろし』を歌いはじめる。
梨子がやってくる。
梨子「（法被を見て）何それ？」
義夫「（歌を止め）お、文豪！」
玲香「（苦笑して）今日からこの家、阪神ファンなんだって」
義夫「おう、トラキチよ、トラキチ」
圭志「トラチキ、トラチキ！」
和夫「今年は阪神が優勝しそうなんだ。パパとよっちゃん、阪神ファンだろ？　もし優勝して日本一になったら家族みんなで『六甲おろし』を歌おうよ」
梨子「は？　なんで？　意味わかんない」
義夫、タイガースロゴの入った紙袋から法被と鉢巻を取り出す。
梨子が座ると、義夫が梨子に法被を着せて鉢巻をしめる。
特に抵抗しない梨子。いつものことなのだ――
義夫「これで新人賞は頂きだな！」
梨子「（無視して、和夫に）パパ、ずいぶん早かったね。もっと観光とかしてくれば良かったのに」
和夫「よっちゃんが『早く函館帰りたい』ってきかなくてさ」
玲香「（笑って）なんで着いてったのよ。親友の出張についてくひとはじめて見たよ」
義夫「暑いんだもん、大阪」

玲香「函館だってじゅうぶん暑いよ」
義夫「（メガホンで）早く秋来〜い！　大西義夫が函館で待ってますよ〜！　『秋』っていやァ我が家のマドンナはどうした？」
梨子「よっちゃん、それ死語だから」
　義夫、残り一枚の法被を取り出す。
美佐「仕事よ。次が見つかったの」
義夫「そりゃめでたい……でも日曜だぞ？」
梨子「ホテルなの。土日関係ないの」
玲香「いま、英語できると即採用なんだって。多いじゃん外国人。なんて言うんだっけ？　インバウン？」
梨子「（そうめんを啜って）インバウンド。あたしはともかく、あき姉は絶対に着ないよ、こんなダサいの」
和夫「（笑顔で）着るよ」
梨子「着ない」
玲香「お姉ちゃん、あたしらと違って筋金入りの箱入りだもん。きっと野球のルールすら知らないよ」
義夫「亜希と玲香と梨子で差なんてつけなかったぞ！（和夫と美佐に）なあ？」
　和夫と美佐、笑顔で頷く。
玲香「（前のめりに）つけてたよ！」
梨子「（頷いて）あき姉は特別だった」
義夫「（納得いかず）そうか？」
玲香「そうだよ。間違いない」
梨子「だから結婚だって――」
美佐「（さえぎって）梨子！」
　梨子、楓を見て舌を出す。楓、微笑む。
和夫「亜希、今頃くしゃみしてるぞ」

○亜希の勤務するホテル・フロント

　制服姿の長女・小久保亜希（３４）がネパール人女性スタッフ（サル・２４）と外国人団体客のチェックインをしている。亜希、スタイル抜群の美人だ。ネイティブ英語ではないがしっかりした英語で接客している。
亜希「（突然、くしゃみして）」

○小笠原家・リビング（夜）

　夕食後――
　義夫も含めて団欒（梨子だけいない）していると仕事から亜希が帰ってくる。
亜希「（疲れた感じで）ただいま」
美佐「遅かったじゃない」
亜希「残業……ネイティブときちんと話せるの私とサルちゃんだけだから、頼まれちゃって」

義夫「（笑って）なんだ、亜希のホテル、猿なんか雇ってんのか？」
義夫、子どもたちに向かって猿のモノマネ。
亜希「失礼ね。サルって名前のネパール人。いい子なんだ」
亜希、楓たちの法被を見て、
亜希「大阪みやげ？　あら、いいじゃない」
義夫が亜希に法被を渡すと、亜希が素直に着る。
義夫「今日からみんなで阪神応援するんだ」
亜希「ふーん、いいんじゃない」
亜希、出ていく。
玲香「超意外！『無駄な買い物してこないでよ！』とか怒ると思った」
玲香、時計を見て、
玲香「あら、もうこんな時間。瑛斗、パパにチンして」
瑛斗、圭志を連れて部屋の小さな仏壇へ。五十嵐亮一（享年３０）の遺影。元ヤンでワルっぽさが抜け切れていないが、優しい笑顔。
圭志が鈴を連打する。
玲香「コラ！　圭志！」
圭志、「してやったり」の笑顔。その笑顔が亮一にそっくり。
瑛斗、行儀よく手を合わせると、圭志を連れ出ていく。
玄関チャイムが鳴り、美佐が玄関へ。
義夫「さてと、俺もそろそろ引き上げるとするか」
義夫、立ち上がろうとして、よろける。
玲香「ちょっと、大丈夫？　飲みすぎなんじゃない？」
義夫「（笑って）大阪の熱波にやられたかな」
美佐とともに、義夫の内縁の妻、大野幸子（５９）がくる。幸子、義夫と異なり、容姿も服装も地味だ。
義夫「それじゃ和夫、またな」
和夫、義夫に手を上げる。

○同・梨子の部屋（夜）

楓がパジャマで画用紙に絵を描いている。夏休みの宿題だ。
部屋には楓ひとり。鉛筆の下書きだが、絵が上手いのがよくわかる。家族の絵。義夫もいて、九人全員が横並びに笑顔でピースサイン。
楓「（いまいち納得いかない）」
楓、新しい画用紙を取り出して、
楓「！（いい考えが浮かんだ）」
ドアが開いてコーヒーカップを持った梨子が入ってくる。
梨子、椅子に座るなり笑顔になって、
梨子「あき姉、法被着てご飯食べてた」

部屋の隅に放られた梨子の法被と鉢巻。
楓「東京ばあばが巨人ファンなの」
梨子「あき姉らしいや。じゃ、あんたも巨人ファン？」
楓「（頷いて）でも、今日から阪神応援する。梨子ちゃんはどうする？」
梨子「（苦笑して）あたし、誰かの応援なんかしてる場合じゃないからさ」
楓、梨子の背後にやってきて、机上のノートPCのモニターを覗く。
モニターには函館市内単身者用アパートの不動産情報。
楓「ホントに出てっちゃうの？」
梨子、モニターをスクロールしながら、
梨子「耳栓が体質に合わないんだよね。なんか違うの。集中できない」
楓「……（寂しそう）」
梨子「夜まとめて書こうにも、バイトもあるしね。あたしが出てったら、楓がこの部屋使いなよ」
階下から亜希の「楓も早く寝なさい！　夏休みだからって夜更かしはダメよ！」という声がクリアに聞こえてくる。
楓、「は～い」と返事する。
梨子「狭いながらも楽しい我が家、ってか」

○梨子のバイトする本屋（昼過ぎ）
小説単行本コーナーで平積みしているエプロン姿の梨子。
梨子、ベストセラー本を見つめ、
梨子「……（憧憬と焦り）」

○同・前の駐車場（夕刻）
本屋から梨子が出てきて、駐輪場へ向かう。
駐輪場で梨子がママチャリを解錠していると、車のクラクションが聞こえて――
梨子「？（顔をあげて）」
梨子の視線の先に『大西クリーニング』と書かれたハイエース。その運転席で義夫が手を振っていた――

○走るハイエースの中（夕刻）
運転席の義夫と助手席の梨子。
梨子、後部を振り返る。子ども用の布団数枚と梨子のママチャリ。
梨子「（うんざりと）圭志のおねしょか」
義夫、唐突に、
義夫「アパート借りるなんてやめとけ」

梨子「楓から聞いた?」
義夫「(頷いて)楓、やっと元気になってきたとこじゃないか。責任感じてるぞ。可哀そうに」
梨子「楓じゃないよ! ついでに言うと瑛斗でもない……圭志だよ。あんなヤンチャ小僧いたら小説なんて書けるわけない」
義夫「子どもの成長なんてすぐだ。もうじきおとなしくなる」
梨子「ならないよ、きっと。(ひとつ頷いて)圭志はならない」
義夫「なんでそう思う?」
梨子「……わかってるくせに」
義夫「父親に似てるからか?」
梨子「……あき姉が言ってた。函館で亮一くんのこと知らないひといなかったって」
義夫「育児放棄だったんだ。若いときのことはおおめに見てやれ」
梨子「ウチだってパパもママも施設育ちじゃん。でも、悪いことしてないし、誰も傷つけてないよ。(言い難そうに)人間ってたぶん環境が作るんじゃないよ。遺伝だよ。圭志はずっとヤンチャなままいくんだよ」
義夫「……本当にそう思うか?」
梨子「子どもふたりも残してバイク事故で勝手に死んじゃうし……ベタ過ぎて、小説のネタにもなりゃしないよ」
義夫「……(寂しそう)」

○小笠原家・玄関(夕刻)

義夫が子ども布団を玲香に渡している横を梨子が通る。
玲香「おかえり」
梨子「……ただいま」
リビングから圭志のはしゃぐ声が聞こえてくる。
梨子「圭志、おねしょダメだよ! よっちゃん、次からおカネ取るってよ!」
梨子、階段を駆け上がる。
玲香、思わず義夫を見る。
義夫「(笑顔で)取らない取らない」

○同・ダイニングキッチン(日替わり)

晩夏の日曜、爽やかな朝——
和夫と美佐と玲香が子どもたちと朝ご飯を食べている。品数豊富で彩り豊か。みんな食欲旺盛で——
和夫「それじゃ楓、阪神の四番バッターは?」
楓「(即答で)大山!」
和夫「正解。じゃ瑛斗、阪神の本拠地は?」
瑛斗「……阪神甲子園球場」
和夫「正解。じゃ玲香、甲子園球場はどこにある?」
玲香「(自信満々で)大阪府大阪市」

和夫「ブー。正解は兵庫県西宮市」
瑛斗と圭志が「ママ、間違えた！」と大はしゃぎで――

○同・リビング（昼過ぎ）

楓がひとり、画用紙の絵に色を塗っている。家族の絵。指揮棒を握るタキシードの義夫がいて、正装した家族みんなが笑顔で合唱している。構図も良いし、色も良い。

楓「（楽しそうに）」
パジャマ姿の梨子が来る。
梨子「あれ、みんなは？」
楓「（色塗りしながら）ママは仕事。じいじたちはくわがた取り行った」
梨子、「ふ～ん」と楓の絵を覗く。
梨子「（感心して）いい絵じゃん。やっぱりあんた絵の才能あるよ」
楓「（ちょっと得意げに）梨子ちゃんが本出したら、楓が表紙の絵描いてあげるね」
梨子「（笑顔で）大きく出たな」
梨子、ダイニングキッチンへ。冷蔵庫を開ける音して――
梨子の声「完成したら、じいじとばあばに見せてあげな。きっと泣くよ、あのふたり」

○亜希の勤務するホテル（昼過ぎ）

函館有数の老舗ホテル、その風景いくつか――

○同・フロント

チェックイン開始前でのんびりムードのなか、亜希とネパール人のサルが談笑している。

サル「（外国訛りの日本語で）亜希さんのハズバンドもきっとグッドルッキング。日本語、何だっけ？　確か、数字が入る」
亜希の左手薬指には指輪があって――
亜希「『二枚目』。否定はしません（笑顔）」
サル「なんで離れて暮らしてる？」
亜希、周囲を見て誰も聞いていないのを確認して、
亜希「（思い切って）サルちゃん、誰にも言っちゃダメだよ。娘が……（やっぱり後悔）まあ、ちょっとあってね」
サル「（真剣に）日本語、難しい。ちょっと、何あった？」
亜希「サルちゃん、『姑』ってわかる？」
サル「しゅうとめ？」
亜希「ハズバンドのママ」
サル「（頷いて）」
亜希「そのひとと合わなくてさ――」
そこへ支配人の西山（47）と旅行会社の社員（道下朋

美・34）が通りかかる。
朋美「（亜希を見て）小笠原さんじゃない？」
朋美、興奮して亜希のもとへ。
西山「違う違う、小久保さんだよ」
朋美「（無視して）バスケ部の小笠原さんでしょ？　道下だよ！　道下朋美！　中三のときクラス一緒だったじゃん。亜希ちゃん全然変わらないね！　よっ、函館小町！」
亜希「（引き気味に）久しぶり……道下さんも変わってないね……ハハハ」

○居酒屋・ホール（夜）

にぎわう店内。テーブル席に亜希と朋美と鈴木麻衣（34）いる。
朋美がひとりはしゃぐなか、亜希と麻衣は微妙な感じ。
朋美「あ、体育の伊藤っていたじゃん。すぐ女子の身体触ってくるキモいヤツ！」
亜希と麻衣、興味ない。
朋美「あいつさ、あのあと別の中学行って、生徒にぶっ飛ばされて登校拒否になっちゃったんだって！」
麻衣「（少し興味あって）へえ、いい気味じゃん」
朋美「ふたりは覚えてる？　二個下で超有名だった五十嵐亮一」
亜希「……（俯く）」

×　×　×

朋美がつぶれて寝ている。
麻衣、バーボンロックを飲んで、
麻衣「つくづく田舎もんだよね、こいつ」
亜希「え？」
麻衣「三十過ぎて中学の先公の話だけで酔い潰れた。きっと悩みとかないんだろうね」
亜希、苦笑い。
麻衣、冷酷に笑んで、
麻衣「でもホッとしたな」
亜希「？」
麻衣「天下の小笠原さんでも、東京じゃ通用しなかったわけでしょ。あたしも東京憧れたけど、行かなくて正解だったよ」
亜希「（控えめに）いや、通用するとかしないって話じゃ――」
麻衣「（遮って）そうだ。じつはウチの息子、楓ちゃんと同じクラスなんだ。鈴木大雅。よろしくね。シンママ同士、仲良くやろうよ（厭味っぽく）苗字、戻さないんだね。やっぱり、意地？」

○小笠原家・玄関（夜）

亜希が帰ってくる。怒っている。
亜希「なによ、あの言い種！」

楓が画用紙を持って駆けてくる。
楓「ママ、見て見て！　じいじとばあば泣いたんだよ、この絵見て！」
亜希「楓、クラスに鈴木大雅って子いる？」
楓「（呆然と頷いて）」
亜希「勉強も運動も絶対負けちゃダメだからね！　ぶっちぎってやりなさい！」
亜希、そのままぶつくさ言いながら行ってしまう。
楓「（絵を見て）……」
完成した絵。いい絵だ。

○総合病院（外観・朝）
広大な敷地面積を持つ市内の大病院。その風景、いくつか――

○同・頭頸部外科
多くの患者が診察待ちをしている。

○同・同・診察室
担当医師の細田真理子（36）の前に並んで座る和夫、美佐、義夫。三人の表情は一様に暗い――
真理子、勝ち気が顔に出ている美人で、
真理子「（微かな溜息）まだ、ご決断できませんか？」
和夫「……（苦笑し）すみません」
美佐が心配そうに和夫を見やる。
義夫「あんた、いま溜息吐いたろ？」
真理子「（ムッと）あんた？　吐いてません！」
義夫「（吐き捨てるように）それが親みたいな世代と話すときの態度かよ」
和夫「よっちゃん、いいんだ。真理子先生の気持ちもわかる。俺が早く決断しなけりゃいけないんだ」
義夫「（声を荒げ）いいか先生、ここにいる小笠原和夫は北海道でいちばん自動車売った男だ。凄い男なんだよ。知ってっか、『道南モデル』！」
和夫と美佐「よっちゃん」
義夫、意に介さず、
義夫「知らねえのかよ？」
真理子「（困惑し）道南モデル？」
義夫「医者のくせに不勉強だねェ。いまや関西でも話題沸騰だよ」
真理子「何が言いたいの？」
義夫「『声が出せなくなる』なんて言われて、『どうぞどうぞ』って即答できるビジネスマンがどこの世界にいるんだよ！」
真理子「（投げやりで機械的に）だから、何度もご説明してます。

喉頭を取っても、『食道発声』『ＥＬ発声』『シャント発声』など、代替発声方法はあるわけでして――」

義夫「（遮って）先生さ、東京のびっくりするような有名大学出てるんだってね」

真理子「……それが何か？」

義夫「（立ち上がって）悪いことは言わねえ。もう一回幼稚園からやりなおしたほうがいい。和夫、美佐ちゃん、行こう」

義夫、診察室を出ていく。

和夫と美佐、平身低頭し、

和夫と美佐「申し訳ございませんでした」

真理子「（顔を引きつらせながら会釈）」

○同・駐車場

和夫のセダンと義夫のハイエースが並んで駐車してある。その横で義夫が和夫と美佐に、

義夫「まだ札幌もあるし、なんなら東京まで出張ってもいいんだからよ」

和夫「よっちゃん」

義夫「ん？」

和夫「俺、決めた。ここで手術するよ」

美佐「真理子先生も熱心に診てくれたしね。真理子先生にお任せしようよ」

義夫「……おい」

和夫「（笑顔で）会社だってすぐにクビなんてことにはならないさ」

美佐「そのときは私もめいっぱい働きます」

義夫「……（考えて）なあ、ちょっとだけ待ってくれないか？」

和夫と美佐「？」

義夫「頼む、ちょっとだけ待ってくれ」

○同・職員専用出入口（夕刻）

義夫が壁に寄りかかっている。

真理子が退勤してくる。

真理子「（義夫に気づき少し警戒）」

義夫、真理子の前へ。

真理子「な、なにか？」

義夫「（頭を深く下げ）最後に言った言葉は取り消します。どうもすみませんでした」

真理子「いや、別に（俯く）」

義夫「（頭を上げ）ひとつだけ質問させてください」

真理子「（顔を上げ）？」

義夫「親でもいい、旦那でもいい、恋人でもいい、先生にとっていちばん大切なひとが和夫と同じ状態なら、先生はどうする？」

義夫の射るような目。
真理子、深く考え、
真理子「（義夫の目を見つめ）私か、私が心から信頼する外科医でオペします」
しばしの間。
義夫「（涙目で頷き）そっか。そうなのか。ありがとう。（絞り出すように）ありがとう、先生」

○小笠原家・玄関（朝）

八月下旬、新学期のはじまり――
ランドセルを背負った楓、瑛斗、圭志の三人。圭志はランドセルに背負われている感じ。楓、丸めた画用紙を大事そうに抱えている。
三人、「行ってきまーす」と出発し、家の前のなだらかな坂道を『六甲おろし』を歌いながら下っていく。
「行ってらっしゃ～い」と見送った美佐と三姉妹。
美佐、『六甲おろし』を口ずさみながら家のなかへ。
亜希「（心配そうに）あんなの歌ってイジメられないかしら?」
玲香「（伸びをして）あ～、やっと学校はじまってくれたよ～」
亜希「あたし今日休みだから、ママと四人でご飯でも行こうか」
玲香「いいね、行こう行こう」
梨子「（浮かない顔で）」
亜希「あ、梨子はバイトか」
梨子「（首を横に振って）あのさ、ママ抜きでちょっと話せないかな?」

○カフェ・店内（午前）

お昼前でまだすいている。
ボックス席に三姉妹いる。
梨子の対面に亜希と玲香。テーブルにはサンドイッチセットとドリンク。
亜希「パパの最近の阪神熱、アツ過ぎて引くんですけど」
玲香「（頷いて）そもそもパパってなんで阪神ファンなのかな?」
亜希「だよね。道民で阪神ファンってあんまりいないよ。よっちゃんの影響かな?」
玲香「パパ、子どもの頃から好きだったらしいよ。よっちゃんが函館来たのって成人してからでしょ?」
亜希「そのへんがあいまいなんだよね。よっちゃんって謎が多いから」
玲香「亮くんも一目置いてたしね」
亜希「亮一くんがビビるんだからたいしたもんだよ（笑う）あ、あれ覚えてる?」
盛り上がる亜希と玲香。
それに対し梨子、

梨子「（思案顔）」
　玲香のスマホがラインを受信する。
玲香「ママからだ。（ラインを読んで）『六四三のゲッツーってどういう意味？』だって。なにこれ？」
亜希「野球用語だよ。確か、二塁と一塁で同時に二つアウト取ること」
玲香「へえ、あき姉、野球詳しいじゃん」
亜希「陽介が好きなの。楓が生まれるまえはよくふたりで東京ドーム行ったもの」
玲香「仲睦まじい時期もあったんですねェ」
亜希「なきゃ結婚なんかしないよ」
梨子「（唐突に）あのさ、ふたりは結婚するときパパからいくら貰った？」
亜希「え？」
玲香「梨子、結婚するの？」
梨子「（首を横に振って）相手がいない。でも知りたい。ねえ、教えて」
亜希「なによ、突然」
玲香「それ知ってどうするの？」
梨子「じつはあたし、あの家出ようと思ってるんだよね」
×　×　×
亜希「バイト辞めて、一人暮らしして、それで本当にプロになれるの？」
梨子「……なれなくたっていい。悔いを残したくないの。死ぬときに『やりきった』って自分を肯定しながら死んでいきたいの」
亜希「（苦笑し）あんた、いくつよ？」
玲香「……（責任を感じて）」
亜希「あたしや玲香のときに比べて、パパだいぶ偉くなったから、頼めば助けてくれると思うよ」
　玲香のまえのサンドイッチの皿だけ半分くらい残っている。
梨子「レイちゃんが気にすることないよ。パパとママにとって、楓と瑛斗と圭志の成長が生き甲斐なんだから。いてあげて」
玲香「（涙目で）梨子ォ」
亜希「あたしと楓は来年あの家にはいないかもしれないけどね」
玲香「（驚いて）え、東京戻っちゃうの？」
亜希「（頷いて）陽介さえ決断してくれたらね。楓はやっぱり都内の中学に入れたいの」
梨子「やめときなよ。ゴッドマザーが陽介さんを手放すわけないよ。楓が可哀そう。せっかく元気になったのに」
玲香「そうだよ。あのお義母さんじゃ無理。楓は函館の家族とよっちゃんのことが大好きなんだよ。いまさら東京に戻るだなんて楓が可哀そう」

梨子「楓って物凄く感受性が豊かだからね。ここみたいに自然豊かな環境で育てたほうが絶対にいいよ」
亜希「（ムッと）楓、楓、楓って、あたしの人生はどうなるのよ！あたしはすぐにでも東京戻りたいし、そのためにいまお金貯めてるの！」

○小笠原家へと続く道（昼過ぎ）

なだらかな坂道を三姉妹で登っている。
亜希「（梨子に）阪神がもうすぐ優勝するらしいから、そのタイミングでパパにお願いしてみたら？」
玲香「機嫌いいだろうからね」
梨子「そうしてみるよ。優勝するのっていつだろう」
亜希「知らないよ、興味ないし」
玲香「優勝しないかもしれないしね」

○小笠原家・ダイニングキッチン

土曜の昼――
玲香がチャーハンを作っている。
梨子がぶつぶつと小説のセリフをつぶやきながら、やってくる。
出勤前の亜希が紅茶を飲んでいる。
亜希「（呆れて梨子に）あんた、それ、家の中だけにしときなよ。（玲香に）それじゃ、仕事行ってきまーす」
亜希、出ていく。
テーブルにはふたりぶんのサラダ。
梨子、耳から耳栓を外して、
梨子「お昼食べるの私とレイちゃんだけ？」
玲香「（フライパンを振りながら）だから、梨子の好きなチャーハンにしたよ」

○函館市総合福祉センター（昼）

函館市若松町にある実在の建物――
その敷地を和夫と美佐、平川恵三（７４）の三人が歩いている。
平川、老齢を感じさせない身のこなし。その首にはネイビーのストールが巻かれている。平川、喉頭摘出者なのだ。
和夫はＡ４の資料を持っている。表紙に『道南銀鈴会』とある。（『銀鈴会』とは、喉頭摘出手術を受けた者への発声技術の指導及び社会復帰を促進する目的で設立された団体。『道南銀鈴会』は函館に実在する――）
和夫と美佐、目前の碑を見て、ぎょっとする。
碑には『土方歳三最期の地』とある。
平川「（笑顔で）心配いらない。世界中、ひとの死んでいない

場所なんて、どこにもありません」
食道発声である。声帯がないとは思えない、その明瞭な声音――

○同・軽食喫茶

平川と和夫と美佐がテーブルで食事をしている。
和夫と美佐は天ぷらそば、平川はカツ丼を食べている。
平川「真理子先生なら間違いない。あそこは真理子先生の上にもしっかりした先生がいます。心配いりません」
和夫と美佐、ホッとしたように見つめあう。
和夫「(恐縮しながら)平川さんとお話していると、まるで健常者と話しているようで……」
平川「(ぴしりと)健常だとか障害だとか思ってはいけない。『個性』と思えばいい」
和夫「(頷く)」
平川「僕も摘出したのは五十代で早かった。食道発声は体力を使います。訓練をはじめるのは若ければ若いほどいい」
和夫「歌は歌えますか?」
平川「え?」
和夫「上達すれば、歌うことは可能ですか?」
平川「(いたずらっぽく)歌ってみせましょうか、ここで」
和夫、希望が見えた――
平川「(笑顔で)ちなみに、術後は麺類をすすれなくなりますよ」
和夫「え?」
和夫、思わず天ぷらそばの丼を見る。

○函館新道を走るハイエース(昼)

秋を感じさせる風景のなか大西クリーニングのハイエースが疾走する――

○走るハイエースの中

運転席に義夫、助手席に楓、後部に瑛斗と圭志がいる。
カーステレオの『六甲おろし』にあわせて四人の大合唱は続いて――

○新函館北斗駅(昼)

函館市のお隣、北斗市にできた北海道新幹線のいまのところの終着駅、その風景をいくつか――

○同・南口広場

北斗市公式キャラクター『ずーしーほっきー』のオブジェを前にしている楓、瑛斗、圭志。
ずーしーほっきー「ほっき〜、ず〜し〜ほっき〜!」
圭志が驚くとオブジェの背後から義夫が顔を出して――

圭志「（にっこり笑顔で）」

○同・駅舎二階の自由通路

巨大な窓があり、ホームに停車中の新幹線『はやぶさ』を上から眺めることができる――

多くのひとでにぎわっている。『撮り鉄』も多い。そのなかに鈴木大雅（12）いる。大人たちにまじって一丁前に一眼レフカメラを構えている。

義夫の声「やっぱり新幹線は格好いいな！」

大雅が声のほうを見ると、義夫が圭志を肩車して新幹線を見せている。その両隣には楓と瑛斗がいて――

× × ×

義夫たち――

瑛斗が義夫の袖を引っ張る。

瑛斗「（涙目で）よっちゃん、お腹痛くなった」

義夫、圭志を肩から降ろして、

義夫「よしトイレ行こう。楓、圭志を頼むぞ」

楓、頷いて圭志の手を握る。

義夫、瑛斗を連れ急いでトイレへ。

楓、心配そうに義夫たちを見ていると、

大雅の声「おい、小久保」

楓、振り返ると大雅いる。

楓「大雅くん……」

大雅「おまえも電車好きなの？」

楓「（首を振って）」

楓、困ったように圭志を見る。楓、大雅のことが苦手なのだ――

大雅「休みの日も無口だな」

楓「……」

大雅「おまえ、夏休みの宿題ズルしたよな」

楓「（不思議そうに）ズル？　してないよ」

大雅「あれ、『家族』の絵だぞ！　家族じゃないひと描いたらダメなんだぞ！」

楓「……みんな家族だもん」

大雅「おまえたち苗字違うじゃん。指揮棒持ってるへんなおじさんも家族じゃないだろ？」

楓「家族だよ……（困って、圭志を見る）」

圭志「カエちゃんをいじめるな！」

圭志、両手を広げ、楓を庇うポーズ。

大雅「（ムッと）おまえ、一年だろ？　俺は六年生だぞ！」

圭志「カエちゃんをいじめるな！」

圭志、大雅を睨む。

大雅「なんだその目つき。生意気だ」

大雅、圭志の頭を軽く叩く。

楓「（驚いて）」
　圭志、すかさず大雅の腕に噛みつく。
大雅「痛い、痛い、痛い！　放せって！」
　その場が騒然となって――

○小笠原家・リビング（夜）

　和夫を中心に美佐、亜希、玲香、梨子、楓が暗い顔で座っている。鈴木家への謝罪のあとで――
梨子「恐れていたことがついにおきたね」
楓「（必死に）圭志は悪くないよ！　先に叩いたの大雅くんだもん！　圭志は楓のこと守ろうとしたの！」
美佐「（楓に）そうだとしても、相手に怪我をさせてしまったのならきちんと謝らなきゃ」
玲香「……みんな、ごめん（俯く）」
和夫「（苦笑し）デビュー戦で六年生を負かしちゃったんだ。たいしたもんだよ」
亜希「（冷酷に）一年生にやられてピーピーギャーギャー、恥を知れっての」
梨子「ちょっと、パパもあき姉も真剣に考えてよ。噛みついたんだよ？　犬や猫じゃあるまいし、お恥ずかしい限りだよ」
美佐「そうよ。どんな理由であれ暴力はダメ」
　玲香、縮こまる。
和夫「よっちゃんがきつく言ってきかせてくれるさ」
梨子「（不安げに）大丈夫かな、よっちゃんで」

○同・風呂場

　瑛斗と圭志が義夫の背中を洗っている。義夫の背中には般若の入れ墨があって――
　義夫、座りなおして瑛斗と圭志と正対して、
義夫「（ドスの効いた声で）圭志！」
圭志「（思わず震えて）」
義夫「楓のこと守ってくれてありがとな」
圭志「（照れて頷く）」
義夫「でもな圭志、相手を傷つけると自分のここも（胸を指して）同じくらい傷つくんだ」
圭志「（自分の胸を見て）」
義夫「噛みついてるとき、楽しかったか？」
圭志「（首を横に振って）」
義夫「くだらない暴力はダメだぞ！　大切なものを守るときだけ！」
圭志「（元気よく）はい！」
義夫「それから、ふたりとも学校で気をつけろよ。六年生のプライドを傷つけたんだ。仕返しがあるかもしれんぞ」
瑛斗「（怯えて）」

義夫「どうしても困ったら、こうしてやれ」
　義夫、ふたりの股間を蹴る振りをする。
義夫「（笑顔で）これがいちばん効くんだ」
瑛斗と圭志「（笑って）ちんちんキック！」

○同・玄関
　義夫が帰るところで――
　玲香がやってきて、
玲香「よっちゃん」
義夫「？」
　玲香、義夫を促し、家の外へ。

○同・前の路上（夜）
　幸子が乗る迎えの軽自動車の隣で、玲香と義夫――
義夫「何をそんなに心配してるんだ？　男の子だぞ。喧嘩くらいする」
玲香「……だってェ」
　義夫、両手で玲香の頭を優しく掴んで、
義夫「和夫の孫で、玲香の息子だ。これ以上の環境があるか？　心配なんかするな」
　玲香、涙ぐんで、
玲香「よっちゃん、ありがとう」

○楓たちの通う小学校（翌日・放課後）
　校門で教師たちが下校する小学生たちを見送っている――

○同・楓の教室
　楓が下校準備をしている。教室には生徒もまばらで――
　楓の近くの席の女子が「楓ちゃん、ばいば～い」と帰っていくと、大雅が周囲を気にしながら楓のもとへ。
　大雅、楓の机に五百円玉を置く。大雅の左手には包帯。
楓「（ぽかんと）？」
大雅「誰にもバラすなよ。（包帯を見ながら）これ、駅で中学生と喧嘩して惜しくも敗れた、ってことになってるから」
楓「……」
　大雅、さらに百円玉と五十円玉を置く。
大雅「チビたちのぶん」
楓「言わない！　ふたりにも約束させる！」
　楓、六百五十円を大雅に突き返す。
大雅「いらないの？」
楓「（力強く頷いて）」
　大雅、ホッとしたように小銭をポケットへ入れ、
大雅「なら、かわりにいいこと教えてやる。赤塚先生から聞い

たんだけど、小久保の絵が六年生の学校代表に選ばれたってさ」

楓「え……（嬉しい）」

○阪神甲子園球場・外観（夜）

夜空に輝くナイターの電光。球場内から大歓声聞こえてきて――

○小笠原家・梨子の部屋（夜）

（ここから無音）

梨子、一心不乱にノートPCのキーボードを叩いている。

机の端のランプが点滅。

梨子、耳栓を外す。

（無音、終わる）

階下からの大歓声！

ドアが開いて興奮した楓が部屋に飛び込んでくる。

楓「梨子ちゃん！　阪神が優勝したよ！」

○同・リビング

テレビでは、阪神の選手たちがマウンド付近に集まって喜びを爆発させている。

瑛斗と圭志も飛び上がって喜んでいる。

義夫「十一連勝だもんな。今年はホントに強いよ。日本一も頂きだ。長かったな、一九八五年から」

義夫と和夫、がっちりと握手。

義夫、背後からレトロなラジカセを取り出し、スイッチオン。軽快な前奏で『六甲おろし』始まる。

和夫と義夫、肩を組んで『六甲おろし』。美佐と瑛斗と圭志も歌いだす。

楓に手を引かれて梨子が来て、家族が勢ぞろい。

義夫、クラッカーを鳴らす。楓、瑛斗、圭志と続けてクラッカー。

梨子「（苦笑して）ちょっと、やりすぎ」

玲香「近所迷惑だよ（苦笑）」

亜希「ラジカセとか久しぶりに見たし（苦笑）」

美佐がホールケーキを持ってきて、テーブルに置く。

美佐「寝る前にしっかり歯磨きするんだよ」

子どもたち、大喜び。

テレビでは岡田監督の胴上げ。

仲良くケーキを取り分けて――

亜希、梨子に目配せして、義夫のラジカセを消す。

梨子「（意を決して）」

梨子が口を開こうとした瞬間――

和夫「今からみんなに話があります」

梨子「（驚いて）え？」
和夫「（梨子を見て）なんだ梨子？」
梨子「（とぼけて）いや、なんでもない。パパからどうぞ」
義夫「いいかみんな。和夫の話を心して聞きなさい」
和夫「パパの声、ずっと変だっただろ？」
娘と孫たち、見合う。
亜希「職業病なんでしょ、それ？」
和夫、みんなの顔を順番に見ていって――
× × ×
楓が泣いている。瑛斗と圭志も涙目。
三姉妹、晴天の霹靂で頭の中は真っ白で――
美佐が楓のもとへ。楓の頭を撫で、
美佐「大丈夫だよ、楓。じいじは長生きするために手術するの。
楓たちとこれからもずっと一緒に暮らすために手術するの」
楓「（泣きながら）でも、声が」
美佐「それも大丈夫。時間はかかるけど、ちゃんと話せるようになるよ。じいじ、頑張り屋さんだからね。きっとまた楓とお話できるようになるよ」
楓が頷いて涙を拭うと、大人の派手な泣き声が――
義夫である。
亜希「（涙目で）だから、最後にみんなで歌いたかったのか……」
玲香「最後とか言わないで！」
梨子「そうだよ、最後なんかじゃない！」
娘たち、泣き出す。すると、孫もまた泣き出して――
和夫「（困ってしまって）」
義夫「（泣きながら）よし、みんなで歌うぞ。和夫の手術成功を祈願して『六甲おろし』だ！ この歌はいま、世界一縁起がいい！ みんな心して歌えよ！」
義夫、ラジカセを巻き戻して、スイッチオン。軽快な前奏鳴り出して――
亜希「（焦って）ちょっと待って！」
玲香「待って！」
梨子「よっちゃん、止めて！」
義夫、止める。
亜希「ごめん、あたし覚えてない」
玲香「あたしもメロディしかわからない」
すかさず楓がサイドボードから歌詞カードを出してきて、玲香に手渡す。
梨子「……よっちゃん、ごめん。ずっと耳栓してたから――」
義夫の溜息。気まずい間――
和夫が歌いだす。声枯れひどく歌いにくそうだが懸命に、懸命に――
和夫「♪オウ、オウ、オウオ～ウ、は～んし～んタイガース、

フレ～フレフレフレ～」
和夫がそのパートだけ何度も繰り返すと、亜希と玲香も口ずさみはじめ――
楓、瑛斗、圭志が加わって――
美佐、義夫が加わって――
梨子が加わって――

○テレビのニュース映像

女性リポーターが函館港から中継している。粉雪が舞っている。
リポーター「本日、十一月四日、函館で初雪を観測しました。これは平年より三日遅く、昨年より十七日早い観測となります」

○小笠原家・リビング（夜）

家族勢ぞろい。もちろん義夫もいる。みんなテレビにかじりついている。
和夫、首にストールを巻いている。喉頭摘出手術は無事成功したのだ――
字幕『二〇二三年十一月五日　日曜日』
テレビの阪神とオリックスによる日本シリーズ第七戦。
ゲームセット――
小笠原家の歓喜！
和夫も盛大な拍手で祝福！
義夫が指揮棒を持って、
義夫「阪神タイガース、三十八年ぶりの日本一を祝しまして～、せ～の！」
小笠原家の『六甲おろし』はじまる。
三姉妹もばっちりマスター済みだ。
いまは歌えない和夫も楽しそう。とびきりの笑顔。
家族で輪になり、肩を組んで、小笠原家の『六甲おろし』は続いて――

○函館空港に着陸する飛行機

晴れ渡った早朝、轟音がして――

○函館空港（早朝）

その風景、いくつか――

○同・一階到着ロビー

義夫と亜希と楓がいる。
楓が笑顔で手を振り始める。
小久保陽介（36）がエスカレーターを下ってくる。陽介も楓に笑顔で手を振り返す。陽介、長身痩躯の二枚目

で映画スターのよう。秋の爽やかコーデを見事に着こなしていて――

○走るハイエースの中

運転席に義夫、助手席に亜希。後部に陽介と楓。

陽介、しきりにくしゃみを繰り返す。

亜希「（心配そうに）大丈夫？」

義夫「陽介くん、風邪か？」

陽介「いえ、北海道をなめてました。もっと着込んでくるべきだった」

亜希「相変わらずドジねェ」

義夫「あとで俺のジャンパー貸してやる」

陽介「ありがとうございます」

楓「（笑顔で）じいじね、先生の許可が出て、お酒も飲めるようになったんだよ！」

陽介「（笑顔で）なら、もう安心だね」

陽介の脇には大きな包み。『お見舞い』とあって――

○小笠原家・リビング（昼）

和夫と美佐の前で陽介が号泣している。亜希と楓は隣で苦笑い。

陽介「（絞り出すように）……お義父さん、よくぞご無事で……」

美佐「……無事ではないんだけどね」

和夫「（苦笑しつつも、そんな陽介のことが可愛くて）」

陽介、ひとは悪くないが、少し抜けているところがあって――

○描写

函館を満喫する陽介と亜希と楓の描写をいくつか――

雪が降ってきた――

義夫のド派手なジャンパーを着た陽介や亜希はもちろん、楓の笑顔が最高に輝いていて――

○函館空港（夕刻）

離陸する飛行機が見えて――

○走るハイエースの中（夜）

義夫が運転席、助手席に亜希。後部では楓が横になって寝ている。

義夫「亜希、向こうの親父さんっていくつになった？」

亜希「え？」

亜希、スマホを取り出して調べる。『衆議院議員・小久保平蔵』のページ――

義夫「なんだ、知らないのか？」
亜希「お義父さんとは、ほとんど話したことないもん。えっとね、いま六十九歳だって。へえ、もうすぐ七十なんだ」
義夫「亜希、期待するなよ。陽介くんは必ず選挙に出る。出ざるを得なくなる」
亜希「でも、男の兄弟は他にもいるし――」
義夫「諦めろ。後継は陽介くんだ」
亜希「なによ、政治評論家みたいに――」
義夫「向こうの母親がおまえに厳しいのもそれが理由だ」
亜希「（鼻で笑って）陽介が国会議員？　馬鹿馬鹿しい。そんなことになったら『世も末』だよ」
義夫「とっくに『末』なんだよ」
亜希「……大丈夫。陽介はきっとあたしと楓を選んでくれる」
義夫「亜希」
亜希「（義夫を見て）」
義夫「楓のことだけ考えろ」
亜希「……考えてるよ」
義夫「……そっか……ならいい」
　気まずい静寂――
　後部の楓、薄ら目が開いていて――

○小笠原家・玄関（日替わり・朝）

　玲香が義夫に子ども布団を渡している。
　梨子が来て、義夫にドレスを一着渡す。
義夫「お、ついに授賞式か？」
梨子「（苦笑し）友達の結婚式だよ」

○同・前の道

　薄っすらと雪が積もるなか、ハイエースの助手席に幸子がいて――
　義夫、後部に子ども布団とドレスを入れると、運転席に乗り込む。
　幸子、後部を見て、
幸子「おねしょか。可愛いね（笑顔）」
義夫「（頷いて）今日も忙しいぞ」
　ハイエース、発車する。

○同・リビング

　和夫と瑛斗と圭志がタブレットで小学校の学芸会動画を見ている。一年生のダンスで圭志がフリを派手に間違えた――
　瑛斗と圭志、爆笑。和夫も笑う。
　梨子がくる。
梨子「あんたたち、何回笑えば気が済むのよ？　パパ、今日は

『銀鈴会』の日でしょ?」

和夫、梨子を見て、頷く。

梨子「それから圭志、あんた今週もたっぷりおねしょしてくれたわね」

瑛斗がドキリとする。

圭志、瑛斗を見てから梨子を見て、頭を下げる。

圭志「梨子ちゃん、ごめんなさい」

梨子「(呆れたように)あたしがおむつしてあげようか?」

美佐が来る。

美佐「梨子、いじわる言わないの!」

和夫が立ち上がる。

和夫、胸元の手帳を取り出して、何事か書きこみ、梨子に見せる。

手帳には綺麗な字で『梨子も来るか?』とある。

梨子「(和夫に)あたしも?」

和夫「(笑顔で頷いて、手帳に書き込み)」

『たまには、外の世界も見たほうがいい』。

梨子「(少しの間のあと、頷いて)」

○函館市総合福祉センター・会議室

会員たちが食道発声の訓練をしている。

初心クラスの和夫には平川がマンツーマンでついている。

和夫、懸命に平川の指導どおりに「あ」を発声するも、うまく声にならない。

和夫、もどかしい――

隣の梨子ももどかしい――

平川「(笑顔で)小笠原さん、とてもいいです。空気の摂取量が多い。その調子です。焦らないで」

○走るセダンの中(午後)

美佐が運転して家路へ向かっている。後部には和夫と梨子――

美佐「梨子、どうだった?」

梨子「平川さんって本当に凄いね。スーパーマンみたい」

和夫、頷いて、手帳に書き込む。

『パパ、格好悪かったろ?』。

梨子、必死で首を横に振る。

和夫、書き込む。

『不屈の闘志』。

梨子「(手帳を見て)不屈の闘志、か」

美佐「パパがどうしても梨子には訓練の様子を見せたいって言ってね」

梨子「(和夫を見て)パパ……」

和夫、書き込み。『お互い頑張ろう！』。
梨子「（涙目で頷いて）」
和夫、書き込む。
『それから圭志のおねしょだけど』。
梨子「？」

○小笠原家・リビング

玲香と瑛斗と圭志でタブレットの学芸会動画を見ている。おなじみ圭志のダンス。三人、爆笑していると、玄関のドアの開く音がして――
和夫たちが帰ってくる。
玲香「おかえり」
美佐と梨子「ただいま」
和夫、玲香に手を挙げる。
梨子、瑛斗を見て、
梨子「瑛斗、ちょっとおいで」
梨子、瑛斗を連れて部屋を出ていく。
玲香「（不思議そうに）なんだろ？」

○同・梨子の部屋

梨子が椅子に座って、瑛斗の話に聞き入っている。
瑛斗、梨子の前で体育座りしながら、
瑛斗「――お父さんとバイクが海に沈んでくの。本当の事故は海なんて関係ないのに、夢だと絶対にお父さんは海に落ちちゃうの。夜の暗くて冷たい海に」
瑛斗、涙目になって――
瑛斗「圭志はおねしょなんてとっくに卒業してた。でも、あいつ、優しいから」
梨子「瑛斗、おいで」
梨子、瑛斗を立たせて抱きしめたあと、壁のホワイトボードを見せる。ここ数年のコンクール一覧。
梨子「梨子ちゃんね、これ、全部落ちたよ。綺麗さっぱり全部落ちたよ……恥ずかしいよ、恥ずかしくてたまらないよ」
瑛斗「……（ホワイトボードを見つめ）」
梨子「でも諦めないよ。必ずコンクールで一等賞取って、小説のプロになる。だから、瑛斗も頑張ろう」
瑛斗「（涙を拭って頷いて）」
梨子、机の引き出しからタイガースの鉢巻を取り出し、自分の額に締める。
梨子「（笑顔で）瑛斗、不屈の闘志だ！　梨子ちゃんもこれ締めて小説頑張るよ！　阪神みたいに『日本一』になってみせるよ！」

○同・リビング（夕刻）

亜希と楓も帰ってきている。
家族総出でタブレットを見ている。圭志のダンス。間違えた――
家族みんなでまた爆笑――
梨子と瑛斗が来る。
梨子「楓と圭志、おいで。今日は特別にあたしがお菓子買ってあげる」
楓「（不思議そうに）なんで？」
梨子「圭志にご褒美だよ。（誤魔化すように）学芸会のダンスでみんなをたくさん笑わしてくれたからね」
圭志、大喜びで梨子のもとへ。
梨子「楓もおいで」
梨子、タイガース鉢巻を締めたままだ。本人、気づいてなくて――
楓、それを指摘しようとすると、亜希と玲香が口に人差し指を当てて「黙ってろ」のサイン――

○コンビニ・レジ

子供たちのお菓子の会計をする梨子。
店員「（鉢巻を見ながら）……日本一、おめでとうございます」
梨子「（怪訝な顔で店員を見て）？」
背後で、楓と瑛斗と圭志が笑いをこらえていて――

○函館駅（昼）

駅舎やその周辺風景いくつか――
函館はもうすっかり冬である――

○同・ギャラリー

『イカすホール』という名のスペースの一角で、『道南小学生絵画コンクール』の展示が行われている。家族連れや観光客でにぎわうなか――
義夫と和夫を先頭に小笠原家の面々が駆けてくる。みな、興奮していて――
義夫「お～、どれだどれだ？」
楓が指さした先に、楓の夏休みに描いた『家族』の絵がある。
一番奥に大きな金のリボン付きで飾られていて――
玲香「（驚いて）金賞ってほかにもたくさんあるのかと思ってたよ！」
美佐「（呆然と）金のリボン、楓だけだ」
梨子「（万歳して）正真正銘の『一等賞』じゃん！　ヤッター！」
亜希「（亜希だけがはじめて見る楓の絵。ショックを受けて）」
和夫と美佐が涙ぐむ。
大人の派手な泣き声がして――

義夫である。
周囲が騒ぎ出す。絵の中の人物が実際に現れたのだ――
義夫が音頭を取り、小笠原家の万歳三唱が始まって――
ホール全員の万歳になった――
楓の少し照れてはにかんだ笑顔が美しくて――

○小笠原家・亜希の部屋（夜）

亜希と楓が寝るところ――

亜希「楓、本当におめでとう」
楓「（笑顔で）ありがとう」
亜希「……パパがいま頑張ってるの」
楓「（頷いて）」
亜希「パパはいまの仕事続けながらママと楓と一緒に暮らしたいの。そこに嘘はない」
楓「（頷いて）うん、わかってる」
亜希「……東京戻ってもいい？」
楓「（笑顔で）楓もパパと暮らしたい」
亜希「（嬉しくて、少し涙ぐんで）」
楓「でもパパ、大丈夫かなァ。東京ばあば、函館ばあばと違っておっかないから」
亜希「（涙を拭って）信じよう、パパを」

亜希、微かに震えている。楓が気づいて、亜希の手を握って、
楓「（亜希を見て）信じようよ、パパを」

○小笠原家・玄関（日替わり・夜）

大晦日。子どもたちの作った雪だるまがあって――

○同・ダイニングキッチン

美佐と玲香が年越しそばの準備をしている。美佐が天ぷらを揚げ、玲香は自家製麺を茹でている。
亜希と梨子が来て、
亜希「パパたち、いつもの？」
美佐「（頷いて）」
梨子、エビの天ぷらを摘まみながら、
梨子「今年は事情が違うじゃん。パパが風邪でもひきやしないか心配だよ。（驚いて）てか、『揚げたて』旨ッ！」

○昇っていく函館山ロープウェイ（夜）

混み合うゴンドラの中に義夫と和夫がいて――

○展望台（夜）

年越しを待つ大勢のひとびと。
外れたところに義夫と和夫いて――

義夫、和夫に缶ビールを持たせ乾杯。
義夫、缶ビールを旨そうに飲んで、
義夫「和夫、何度目だ、これで？」
和夫、ビールを置いて、メモ帳を取り出し、『４２』と書く。
義夫「もうそんなになるか」
和夫「（笑顔）」
義夫「会社の居心地はどうだ？」
和夫「（少し考え、苦笑）」
義夫、和夫の肩を叩き、
義夫「いざとなったら、またふたりで仕事見つけりゃいいさ。あの頃みたいに」
義夫、函館の夜景を見つめる。
義夫「そうか、あれからもう四十二年もたったのか……」
和夫、頷いてから夜景を見つめ――

○函館空港・一階到着ロビー（朝）

義夫と亜希と楓がいる。三人、厚手のコートを羽織っている。
楓がエスカレーターを指さす。
陽介が見えた――
陽介も今回はしっかりと厚手のコートを着込んでいて――
亜希と楓が笑顔で手を振る。
ところがすぐに、ふたりの表情が凍り付く。陽介の背後に、着物を着た大柄な老女が現れたからだ。
小久保絹枝（７０）。陽介の母。妖気をまとったような圧倒的な存在感で周囲を圧倒していて――

○小笠原家・リビング

和夫と美佐の前で絹枝が深く頭を下げている。
絹枝の背後に座る陽介、亜希、楓はみな表情が暗くて――
絹枝「ご挨拶が遅れましたこと、誠に、申し訳ございませんでした」
美佐「こちらこそ、遠くまでご足労頂きましてありがとうございます」
和夫「……（気弱に頭を下げる）」

○同・玲香の部屋

玲香と梨子と義夫、瑛斗と圭志がいる。
梨子「ゴッドマザーがわざわざ来るなんてね」
玲香「（真顔で）結婚式のときより大きくなってない？」
梨子「（苦笑して）んなわけないって。あき姉を迎えに来たのかな？」

瑛斗と圭志が携帯ゲーム機の取り合いをはじめる。
玲香「こら、静かにしなさい。着物のお婆ちゃんに食べられちゃうぞ！」
圭志「（不思議そうに）あのでっかいお婆ちゃん、ひと食べるの？」
梨子「そうだよォ。圭志くらい小さい子ならペロリとひと飲みだよォ」
瑛斗と圭志が大喜びのなか——
義夫「（深刻そうに遠くを見つめて）」

○同・前の道（午後）

『予約』のタクシーが待っていて——
みなが見送るなか、陽介と絹枝と亜希がタクシーに乗り込む。楓、心配そうに陽介と亜希を交互に見ている。
発車間際、義夫が助手席の窓を叩いて、
義夫「陽介くん、帰りは最終か？」
陽介「はい。ＪＡＬの最終です」
義夫「そうか」
タクシー、発車する。

○亜希の勤務するホテル・ロータリー

亜希たちの乗るタクシーきて——

○停車したタクシーの中

陽介が料金を払っている。
後部の絹枝と亜希。
亜希「（焦っている）」
絹枝「亜希さん、どうかなさいました？」
亜希「い、いえ、別に……」

○亜希の勤務するホテル・ロビー

陽介を先頭に絹枝と亜希が続く。
亜希、終始顔を伏せていて——
たまたま通りかかった勤務中のサルが亜希に気づいて、
サル「（笑顔になって）あきさんのハズバンド、にまいめだァ」
サル、亜希の亭主が想像通りの二枚目だったことが嬉しくて——

○同・スイートルーム

リビングスペースのソファに絹枝が超然と座っている。
亜希が陽介に掴みかかっている。
亜希「（泣き叫んで）陽介はそれでいいの！　それで本当にいいの！　ねえ、陽介！　本当の気持ちをお義母さんに伝えてよ！」

陽介「（叫んで）亜希ちゃん、落ち着け！　とにかく落ち着くんだ！」
亜希、陽介を突き飛ばし、部屋中の物品を破壊しはじめて――
亜希「（叫ぶ）三人で暮らすために一生懸命働いたのに！　お金貯めたのに！」
内線電話が鳴りだし、陽介が困り果てて――
絹枝「（冷酷に）やらせなさい。気の済むまで」
×　×　×
荒れ果てた室内。
ソファに呆然自失で座る亜希を、陽介が介抱している。
対面の絹枝、構わずに、
絹枝「いま、この国の保守政治は風前の灯火。あなたたちの自由意思に任せて、『小久保』という大樹がやせ細ることなどあってはならないのです」
陽介「（叫ぶ）母さん、もうわかったから！」
亜希「（呆然と）私のことはもういいです。楓は、……楓のことはどうお考えですか？」
絹枝「じつに聡明で、美しい子でした」
亜希「……『でした』？」
絹枝「死んだものと思って諦めます」
亜希の心がぽきりと折れて――
亜希、窓の外の夕闇に輝く函館市街地を見つめてから絹枝を見て、
亜希「最後にひとつだけお訊きしても宜しいですか？」
絹枝「（ぴしりと）質問によります」
亜希「（苦笑し）両親そろって施設育ちって、そんなにいけないことでしょうか？」
陽介「亜希ちゃん、やめろ」
亜希「そんなに罪なことでしょうか？」
陽介「罪なわけがないだろ！　もうよせ、亜希ちゃん！」
亜希の目から涙がこぼれ――
絹枝、亜希の涙を見ていられず目を反らす。はじめて人間味が見えて――
絹枝「あなたのお父上が本当に天涯孤独の身であったなら、どんなに良かったでしょう」
亜希「（泣き顔で）？」

○函館空港・一階ＪＡＬカウンター（夜）

陽介と絹枝と亜希がくる。
義夫と楓が待っていた――
陽介を制して、亜希が楓のもとへ。
亜希、楓を抱きしめてから、
亜希「楓、……苗字、『小笠原』に変えようか」

楓、一瞬俯くが、
楓「（笑顔で）うん。いいよ」
陽介が来て、
陽介「（涙目で）楓、パパが全部悪いんだよ」
楓「（笑顔で）誰も悪くないよ」
陽介、楓を抱きしめて号泣。
義夫「（ジッとその光景を見つめていて）」

○同・二階搭乗ロビー前

義夫と亜希と楓がガラス越しに陽介と絹枝を見送っている。
函館空港名物の『もしもしコーナー』は埋まっている。
楓、電話があくのを待っている。もどかしい――
陽介、諦めてスマホを取り出す。
すると、一台あいた――
楓、受話器に飛びつく。陽介も受話器に飛びついて――
陽介「楓」
楓「パパ、聞いて。（急いで、けれど、言葉を選びながら）楓は、函館の家族が大好き。函館の風景が大好き。函館の食べ物も大好き。毎日凄く楽しいよ」
陽介「（何度も頷いて）」
楓「（笑顔で）だから、もう無口じゃないでしょ？　この前なんか梨子ちゃんに『うるさい』って怒られちゃった。だから安心して。何も心配いらないよ」
陽介「（頷いて、涙を流して）」
搭乗を促すアナウンス流れて――
楓「（小声で）ママのことは任せて」
楓、受話器を置く。
陽介「（受話器を置けず）」
楓、笑顔で手を振り続けて――

○小笠原家・前の道（夜）

義夫のハイエースが停車して――

○ハイエースの中

運転席の義夫、後部の亜希と楓。
亜希「よっちゃん、ちょっと待ってて」
亜希、楓を家に送り届け、すぐ戻ってくる。亜希、助手席に座って――
亜希「……もう少し付き合って。いま会うと、パパのこと責めちゃいそうで怖くって」
義夫「（亜希を見つめ、頷いて）」

○ファミレス・外観（夜）

ガラス越しにボックス席で向き合って座る義夫と亜希が見えて――

○同・ボックス席

義夫と亜希、ドリンクバーしか頼んでいないが飲む気にもなれず――

義夫「どこまで聞いた？」

亜希「……小樽の施設で育ったのはママだけだって」

義夫「和夫の家族について詳しく聞いたか？」

亜希「（首を振って）怖くて聞けなかった」

しばしの間。

義夫「……和夫は大阪市内の浪速区ってとこで生まれた。『通天閣』ってわかるか？」

亜希「（ごくりと唾を飲みこみ、頷く）」

義夫「あれのそばだ。男ばっかり四人兄弟の末っ子。兄貴たちが揃いも揃ってろくでなしでな。いちばん上の兄貴は大阪でヤクザやってる。二番めは若い頃に病気で死んだ。で、三番めが――」

義夫、言葉に詰まる。

亜希「（怯えるように）三番めが、どうしたの？」

義夫「……ひとを殺してる」

亜希「（あまりのことに声が出ない）」

義夫「勘違いするなよ。和夫はずっと和夫のままだ。大阪時代も、函館に来てからも。……あいつがいちばんの被害者なんだ」

亜希、胸を抑えたまま俯く。

義夫「それでも恨むか、和夫を？」

亜希、その目に涙が浮かんできて――

亜希「……恨まない。貰ったものが大きすぎて、恨めない。……でも、パパの秘密をきちんと知ってたら、東京で陽介と恋愛なんかしなかったのに、とは思う。こんなにきつい思いしたくなかった」

義夫「亜希と陽介くんが結ばれなきゃ、楓は生まれてないんだぞ」

亜希「……そっか。じゃ、前言撤回」

亜希、微笑みながら涙を拭う。

亜希「（きっぱりと）聞けて良かった。もう未練なくなった。陽介の足を引っ張りたくないからね。よっちゃん、ありがとう」

義夫「（宙を睨んで）」

亜希「（作り笑顔で）ねえ、よっちゃん、聞いて聞いて。あたし今日、自分が働いてるホテルのスイートルーム、メチャメチャに壊しちゃったんだよ」

義夫「（亜希を見て）そうか」

亜希「生まれてはじめて大暴れしたの」

義夫「（優しく頷いて）」
亜希「（涙目で）一矢報いたかったんだァ。いけないことだけど必死で頑張ったんだァ」
義夫「（亜希を見てられず、俯いて）」
亜希「（涙目のまま）よっちゃん、褒めてよ、むかしみたいに」
義夫、亜希の頭を撫でて——
亜希が堪えきれず、号泣して——

○小笠原家・玄関（夜）

鍵が開いて、亜希が入ってくる。
玄関にパジャマ姿の和夫、美佐、玲香、梨子、楓、瑛斗、圭志がいた——
美佐「おかえり、亜希」
亜希、和夫を見つめる。
和夫「（食道発声で、必死に）あ、き、お、か、え、り」
亜希、一瞬泣き崩れそうになるが、
亜希「（笑顔で）ただいま」

○白銀の田舎道（深夜）

ハイエースが走っていて——

○走るハイエースの中（深夜）

運転する義夫、目が虚ろ——
義夫、急ブレーキを踏んで——

○田舎道の路肩

ハイエースの脇で、義夫が頭を地面に打ち付けながら、
義夫「……亜希、ごめんな……ごめんな」
義夫、立ち上がると、ハイエースへ——
まともに歩けていない——
義夫「（空に向かって咆哮）」

○ハイエースの中

雪と泥にまみれた義夫が乗り込んで、エンジンをかける。
義夫、額が割れており、顔中が血だらけで——
義夫「（ひどい眩暈。しかし、意地で）」
サイドブレーキを解除し、ギアを入れて、右足はアクセルを踏む——
義夫「（肉体の限界がきて）」
義夫、ハンドルに突っ伏した——

○白銀の田舎道

ホーンを鳴らしながらハイエースが反対車線路肩に並ぶ
電柱のひとつに突っ込んで——

○総合病院（早朝）

和夫が手術をした病院――

○同・ロビー

幸子と和夫と美佐がソファに座っている。幸子、『大西クリーニング』のスタッフジャンパーを羽織っている。

三人の表情は暗い――

三姉妹が駆けてくる。

亜希「（大声で）手術うまくいった？」

玲香「（大声で）意識は戻った？」

美佐「まだ手術中よ。（毅然と）ここは病院。ふたりとも静かに話しなさい」

亜希「（興奮して）静かになんて話せるわけないでしょ！　よっちゃんが死んじゃうかもしれないんだよ！」

美佐「（毅然と）それでも静かにするの。よっちゃんに恥をかかせないで」

梨子、呆然自失で――

梨子「……嘘だ。嘘に決まってる。よっちゃんだよ？　あのよっちゃんが死ねわけないよ。殺したって死なないよ……」

医師（磯貝徹・３２）が足早に来て、

磯貝「（幸子に）奥様ですか？」

幸子「（困ってしまい）……いえ」

梨子「サっちゃん、『妻です』って言いなよ！」

玲香「そうだよ！　妻なんだから！」

幸子「（申し訳なさそうに）でも籍が――」

磯貝「（無慈悲に）ならばダメです。この中にご家族の方はおられないのですね？」

和夫が磯貝の前に立つ。和夫の隣に美佐が並んで――

美佐「（毅然と）大西義夫の弟と、その妻でございます」

亜希と玲香と梨子「（顔を上げ）？」

○同・相談室

磯貝の前に和夫と美佐。後ろに三姉妹が控えている。

誓約書にサインしている和夫。和夫、手が震えている。

亜希「（和夫を見つめ）」

磯貝、新たな書面を出して、

磯貝「容体が急変した場合の連絡先をこちらへお願いします」

○同・集中治療室

緊急手術後の義夫が寝ている。いまにも死んでしまいそうで――

○小笠原家・リビング（深夜）

壁の時計は深夜一時過ぎ――
和夫と美佐と向き合っている三姉妹。みんな、蒼い顔でいて――
亜希の声「その夜、私たちはパパに、ひとつ、いや、ふたつだけ確かめた。パパは辛かったと思うが、どうしても、訊かずにはいられなかった」
玲香の声「よっちゃんは、誰を、どうして、死なせてしまったのか――」
美佐が立ち上がって、
美佐「私は寝るよ。朝一で、よっちゃんのお見舞いへ行かなきゃいけないからね」
美佐、さっさと出ていく。
三姉妹「(美佐の背中を呆然と見送って)」
梨子が和夫に白紙の紙とペンを差し出すと、
和夫「(首を横に振って)」
和夫、食道発声で声を絞り出す。うまく出ないが、それでも必死に声を出して――
梨子が同席した日から大きな進歩をとげていて――
和夫「(つっかえながら)父親を、殴った。弟……パパを守るためだ。(首を大きく横に振って)殺人なんかじゃない。事故だ。よっちゃんを、恨まないでくれ」
それだけ言って、和夫が土下座する。
慌てて止める三姉妹――
美佐がリビングへ飛び込んできて和夫を抱きしめる。
和夫と美佐、そのまま号泣する。
梨子の声「パパとママは勘違いしていた。あき姉もレイちゃんも私も、パパたちの秘密を知って、こう思っていた」

○楓の描いた『家族の絵』が映って――

亜希と玲香と梨子の声「よっちゃんが本当の家族だったことが嬉しい」

○小笠原家・外観(朝)

雪はすでになく、春めいた陽気で――
字幕『二〇二四年四月』
玄関の表札から『小久保』が消えていて――

○同・梨子の部屋

楓が梨子の椅子に座って、泣いている。楓、中学校の制服を着ている。胸のネームプレートは『小笠原楓』。
黒いドレスの梨子が入ってくる。
梨子「楓、そろそろ出発するよ」
楓「(涙ながらに頷いて)」
楓、ハンカチで涙を丁寧に拭ってから、立ち上がる。机

上には梨子の小説原稿の束があって――

○同・前の道

梨子と楓が家から出てくる。
家族がそろっている。大人は正装で瑛斗と圭志も黒の上下を着ている。
家の前に幸子の運転する大西クリーニングのハイエースが到着して――
幸子が降りてくる。幸子、洗濯済みのタキシードを一着持っている。
美佐「(満面の笑顔で)は～い、それじゃ出発するよ！」
みんな満面の笑みでハイエースとセダンに乗り込んでいく。
セダン組の梨子と楓――
楓「(情熱的に)梨子ちゃん、あれ、絶対に新人賞獲れるよ！　私、泣いたもん！」
梨子「(真剣に)いま、慎重に応募先を検討してるとこ」
ハイエース組の幸子と瑛斗――
幸子「エイトくん、最近、無いね」
瑛斗「(照れて頬を赤らめて)」
幸子「よっちゃんに報告だね」
瑛斗「(力強く頷いて)」
亜希と玲香――
亜希、立派な一眼レフカメラを持っていて、
亜希「楓が大雅くんから借りてきたんだけど、玲香、使い方わかる？」
玲香「(驚いて)大雅くんって、あの？」
亜希と玲香を見上げ、圭志が笑顔。
和夫と美佐が笑顔で頷きあって――

○総合病院・エントランス

すっかり回復した義夫が退院してくる。
隣にいるのは真理子だ。
義夫「和夫ともども、真理子先生にはすっかり世話になっちまったね」
真理子「(笑顔で)それが私の仕事ですから」
義夫、真理子を見つめ、
義夫「先生、その顔がいいよ。あんた、その顔してりゃ無敵だよ(笑顔)」
真理子「……次の連休に横浜の両親と兄夫婦に会いに行くんです。あんまり仲のいい家族じゃないんですけど……」
義夫「そりゃいい！」
真理子「あ！」
真理子が指さした先に義夫の『家族』が待っていて――

○同・駐車場

真理子が一眼レフカメラを構えている。
真理子の隣には幸子がいて――
レンズの先ではタキシード姿の義夫が指揮棒を構えている。
指揮棒を見ながら家族が並んでいて――
楓の『家族』の絵を模した構図――
真理子「じゃ、いきますよ」
義夫「はいよ、先生！」
真理子「（シャッターをきろうとして）」
楓「真理子先生、まだダメ！」
楓が駆けて幸子のもとへ。そのまま、幸子を連れてくる。
正装でない幸子、狼狽えて――
楓「（幸子の耳元で）サっちゃんも家族だから」
幸子「（涙目になって義夫を見て）」
義夫「（笑顔で）作者がいいっていうんだ」
幸子「（涙を拭って、頷いて）」
義夫、指揮棒を振って、
義夫「せ～の！」
家族の歌声「♪オウ、オウ、オウオ～ウ、は～んし～んタイガース、フレ～フレフレフレ～」
真理子がシャッターをきって――

○函館港（夕刻）

四十二年前――
青函連絡船が入ってくる。
× × ×
北海道に上陸するひとびとのなかに大西義夫（19）と大西和夫（16）がいる。
義夫と和夫、未知なる北海道の大地に少し緊張していて――
義夫「和夫、しんどいやろ？　札幌入るの、明日にしよ」
和夫「いや、疲れてへん。いける」
義夫、笑顔で和夫にツッコんで、
義夫「気ィ使えや、ワシがしんどいんや」

○函館山・展望台（夜）

多くの観光客といっしょに、義夫と和夫がいる。
眼下に広がる『函館の夜景』――
義夫「（夜景を見ながら）札幌はやめや」
和夫「（義夫を見て）」
義夫「（夜景を見ながら）和夫、この街で家族作れ」
和夫「（夜景を見て）」

義夫「（夜景を見ながら）家族作れ」

和夫、義夫を見て力強く頷いた――

（終）

第30回函館港イルミナシオン映画祭2024

第28回シナリオ大賞　函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

函館家族

作：土屋　眞利

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2025年2月10日　電子書籍版発行
発行：函館港イルミナシオン映画祭実行委員会 函館事務局
〒040-0055 函館市末広町４番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）
電話 0138-22-1037　http://hakodate-illumina.com/
制作：い一ハコダテ事務局
〒042-0942 北海道函館市柏木町31-15-207
TEL 0138-52-3727　https://www.ehako.com/